納紗布日誌

全

ル 4
4744

東西蝦夷山川地理取調記行

納紗布日誌

多気志楼蔵板

文溪堂蔵

4744

凡例

一 納紗布（ノツシヤフ）注子モロ会所 五ア丹ニテ所 とはノツは岬、シヤムとは側まで蔭も通りて則ち岬の側と云義にして其号は厚消（アツケシ）去箱館五十七り 持場六十里余丁 より根諸 去箱館百七十八里 持場沿海六十里十二丁 まで熱海岸通りにて陸路有りしが今の路は文化五辰年切開てより南海岸通りの者なれば是迄風土の大意を知る人は絶え地名も訛りて聞え知る人稀なりしを鎮将深く惜ませ給ひ余を召て其地を踏で編ならしめ給ふに依て安政五戊午年胃月より厚消より舟を雇ひキイタツプ（地名）通り其より陸路にてハナサキ納紗布の岬を巡りて丹まで根室まで到りしノツシヤフ誌三巻を著し函館府に納む今其要を摘で一冊とし此名を冠むるなり

一 此巻の書振地名を審（タヾ）し其詳を要とせず其事をも省き依て文体に係はらず冗雑に

及ひかゝる類同名なるもの多ければ是は澤字を略せり閲者熟考すへし又牛を別て

大小川澤灣岬 岳 所 平 有 無 岩 石 沼

等の字多けれ共其字を譯し置を着けざれば故に余か疎漏多しといへとも牛坡

一譯のうち草木鳥魚等はいまた考へさるもの有り 僧 蝦夷山海名産

圖會（近刻）蝦夷救荒志（近刻）蝦夷訓蒙圖彙（近刻）等に詳に記しある故之を見て知るへし

且其外のことは只此書にては二三を記して近刻の二部に譲りおきぬ

志士ゝ此地のことを審にせんと欲する人は原稿三巻を熟讀なし玉はんこと

を希ふのみ

萬延元庚申晩冬於下谷二長町金毘羅の門前雲鱗著明窓

源弘誌

戊午納紗布日誌

伊勢 松浦竹四郎 著

東邉扼喉之要險北門鎖鑰之樞港、厚岸為第一泊津矣（下畧鎮守社額裏文）

ともに港南面して（東西二里 南北三里）センポウシ（クスリ）と對し港口に二島ありて船舶を安らくる道

海山のけしき甚よろしき此湾を隔つてあつけしと名付し也

厚岸とは今場所の惣名と成しも本地の土人の家は往古土人の衣服とせし

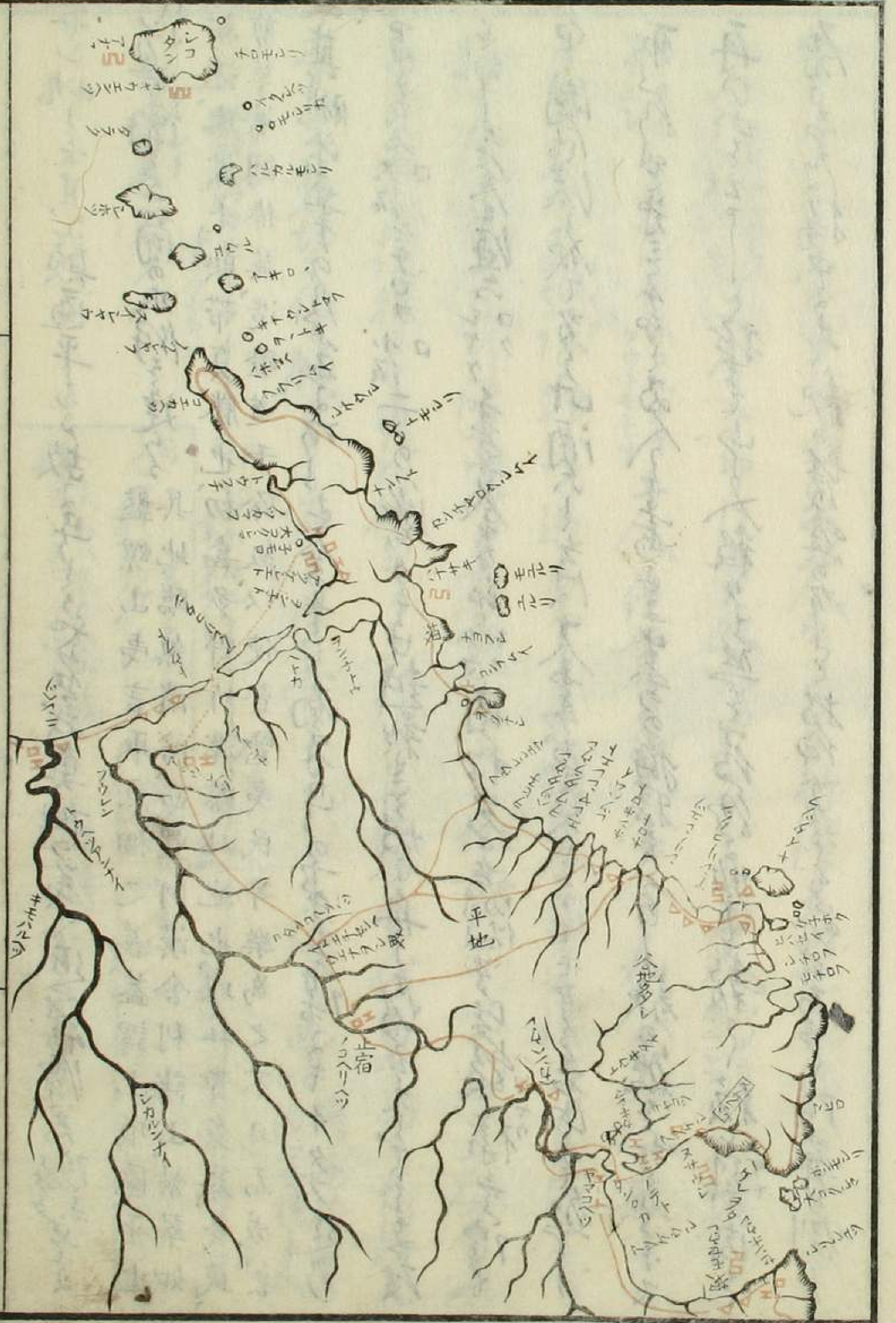
木皮を剥てなしたる皮を本名アツニケウシ（アツニは樹皮 ウシは多し）（アツニは樹皮剥ウシある）こゝに樹を楡（萱揆の類 樹一種）

是なりといはれ是なるくは勾芒木皮可績為布出陸川縣（大明一統志）草木可衣

者曰卉服績其皮者有勾芒布紅蕉布弱錫（明廓湛若赤雅）勾芝木其皮可績

為布粤西偶記に有る所何人今會所 通行屋 鍛冶屋 勤番所 大宗屋 制札 廐 備米蔵 板蔵九棟 合薬蔵 茅蔵三棟 船蔵
の有る地は西向 本名ヌサウシ トマリとも云 船澗の義 といて土人山海の神に奉るイナヲ エナホとも云
といて削掛 ケヅリカケ を多く立置ヌサは幣ウシは多しヌサ数多ある此地に残るを
言ふとなし 諏訪縁起 四 木を削り幣帛の如くして天に祈る諷呪の称ならずして
再て本邦の幣帛に実る事なしまた蝦夷國にてはイナホと称し又ヌシヤと称し此二ッ
の字未定と雖もイナホは棉樹の轉訛なり 本邦関東の農家にて有る青竹白
竹を以て棉樹の形作り糞壌を遠ざけ 俗に云おい塚 五穀豊饒の祈りとをイナホと称するにや
太古の遺風と見えれども又は此等の様に倣ひてイナホとイナヲと訛り称る
やまた又ヌシヤといふ事は蝦夷もあるも又サの轉訛して太麻のみな放て此棉
樹と太麻の二ッは本邦にても今の世に及ぶは祓に用ゐる事も用ひらぬ様に思ひ

なされ給ひまて天地の神を祭る為に設る物にて用ゐる事は同じく今の幣
帛も今は紙麻を用ゐられ上古の時紙麻等の流布薄かりし時は木のことにて
製せるなるべし又知るべき 器 棉樹を神に供へ奉る事古より有るにてこそ棉樹とも
祈樹を奉りし事も知るべし 此遺風小正月の祝木 お祝棒とも云 稗穀を結ひ 樋の頭にくはいらせ
棒 又祝儀棒 等も皆是を削掛 なる事で 武江には正月五日の削掛等皆紙麻にて作る事を
と見えけり夫につけて 万葉集巻十四 常陸 筑波祢尓由伎可母布良留伊奈乎可母加奈
思吉児呂我尓努保佐流可母 又 安比見氐波千等世夜伊奴流伊奈乎加母
安礼也思加毛布伎美末知我氐尓 我 悉 憶 布 里河氏 村田氏 此イナヲを蝦夷地に云ふイナ
ヲと同じと云説あり 強説あり 棉を彼地のイナヲを祈麻 イノリヲ の義なりと 蝦夷
國にては棉樹の轉訛といへどもまたしき説に 周に云 麻を刈と呼ぶ又アサとふも異名にて等



又続出る又の義なり　又ハラをレテと呼ぶ麻ヲンタラシなる名目より何れも行けり　木綿ハ桃

又是ハ麻の一種なり木綿を帯に織る即タラシと云う此地ホウ又同名なり　ヌサウシ　エナヲウシ呼並て国ゟ之　又サレヤン　土産鮭鱒鰯鯡

こまも昆布さゝり鯡鮫布海若椎茸麻皮樺羽もく戸人餘の牡蠣石ゟ朴呼る其地

辺の是之出人　昔は多し近頃大ニ減り　文化六巳年改ゟ千七軒八百四十人　文政壬午改百六軒　安政乃辰改二百十七人

而て異蝦夷山國泰寺　陰涼寺末也　長サ壹丈九寸仏像は九重也　本尊釋迦如来等佛　享和二未命て建

立文化元子年五月入佛供養開基文翁和尚　蓮金　霊峯　俊叟　今ハ

世ヲ度す　御本尊は保十人　此道畑を開き　上ゟ不階数級を上りて

はるの杉ゟ此島さけふりつゝも麓の山風やまさからん

神明社　寛政八戌年最上常郷建立　相殿　杉上大社　傍に龍王の祠　額

誠信二大字　文化二丑年　高橋源久来之を書す　又磯谷を四里て馬頭の非常に備ふ此山をハラ

サン丸山と云。其山顛極平なる故に号しとや。名義魚棚の義し。近比竹潭君喜多野是に

道を開き一箇の木碑を建らる 盤螺山、夷言取魚棚之義、蓋謂山頂扁平也、其地臨熱消湾、西望阿漢舎利諸山、紫翠如新沭、與波光映帯、真勝也、初喜多野竹潭臨此地也、以私費多募夷民、剪草莱闢榛蕪、造磴道千餘級、以使登覧、夷民等楽為之、不日而成[下略]

其眺望筆の及ぶ所にあらず。是より余は南岸の中を傳ふにキイタプ近乃

胃チロフ口 大沼 モチロフ口 小沼 二ツの沼あり。是口越越きる故に舟にて渡

を乗し庄屋伊六(ロク)、レヤケ金蔵、金太郎、クマキツ、両松、岩吉、治佐、ハッヤウ、喜助らも

皇國の風俗に於て有る叶酒いと云は大分手あまて父サンケドモ大なる老山にて然し

取られを爰に金太郎と或人にまあるに生命の攤振えかし 歎の魁を折られけて

再び山を出ましと拐て山に入 殺りた熊を取得て報し 復を割(サキ) 肉を

屠りて後は傷中まで、親の髭鬚の毛まで抜りてまで厚く埋葬の例を

挙しが又有志の男女を平土人を号す。而して竹潭君此地に千級の段を土人を召し

加し 近世婦夷人為詩出ス 又金太郎は其改名ありてクチレリ土人

シトヌイ サケニレ とチウルイ ホロエメキ ケウトモヒレテ 土人と徒黨を結び十余人を加へ初人十ノ人を殺害し マメキリ ホニレアイノ ノチウトレ イヌクマ

其乱に第て根(チモロ)法に押渡り追て黨を集め城主を伐其蔵を奪

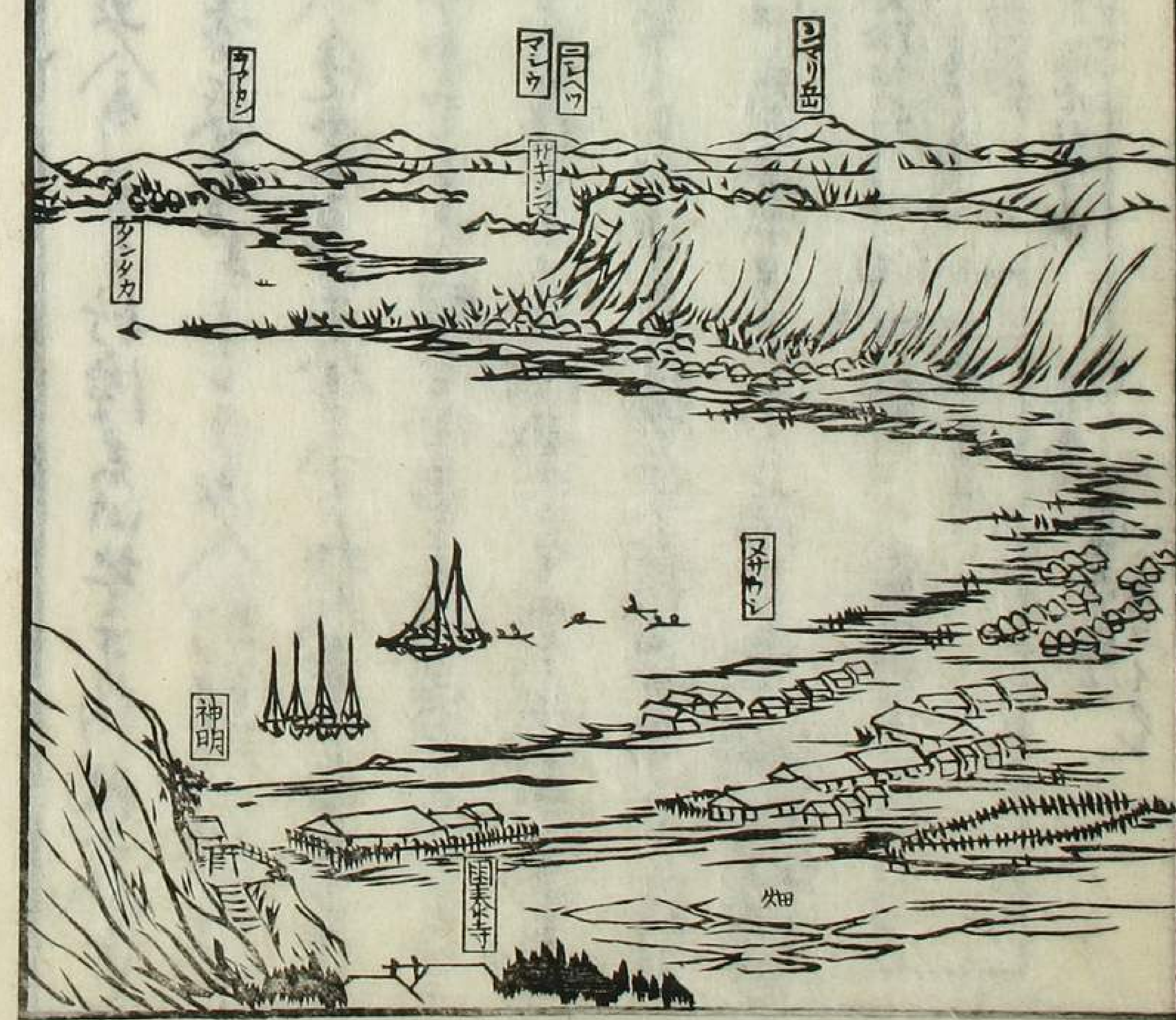
捉せんとの勢に及び防備所の首長イコトイ祖母(ニユチ)ヲツキニも外十三人の首長

多くの土人を従ひ根室を追討使の来りを待て其徒黨を伐取一島を安静に

志せる勲功に依て頗る厚く褒賞ありしよし、像を画き 蠣崎将監号波響様之人

○首長(アツケシ) カモイトイ 妻ヲツキニ
　オ ─ 首長(クチレリ) ツキノイ
○同 シツホカニ 妻ヒイランケ 墓ヲシ子トウ
○同 マイトンケ 妻アツフヨフ
　妹 ヲベレケマツ 夫和人漆屋佐治兵衛
○同 イコトイ 妻 姫ムリセ 墓ヤマコヘツヽ
○年寄 金太郎 妻スイクシ

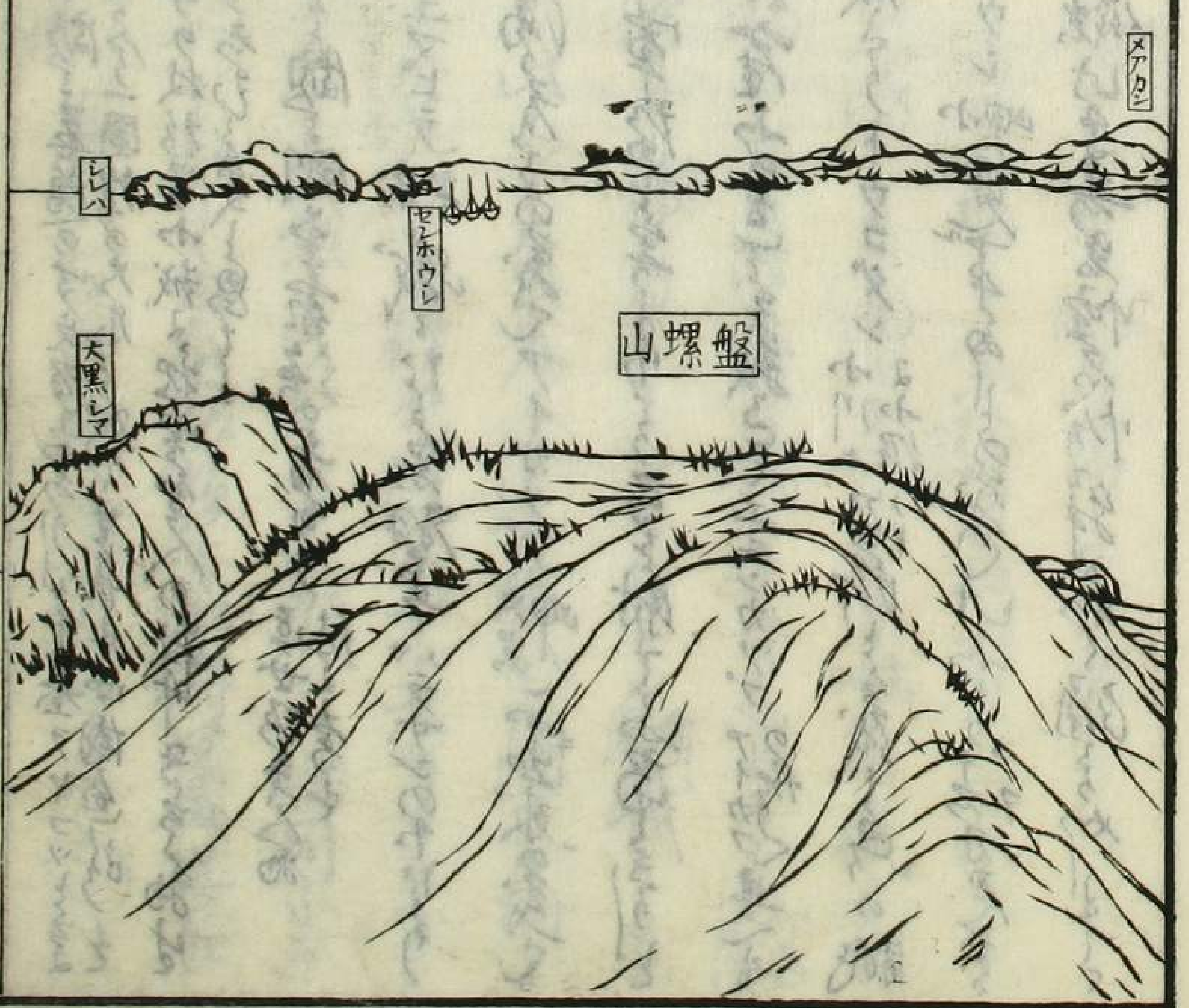
蜻蜓洲畫㠯孤島別
乾坤天度雖稍異可
以充北藩環海魚鰕
冨連山草木蕃竭此
山海利要地足築墩
毛人頗强健茅屋自
成村裸體掉小艇不
敢畏寒暄撫育得其
法可以補兵屯惜哉
季世弊曽無一定論



貫堅圖其利空勞志
士魂惟我有所見建
策陳迂言非速改舊
習全島叵保存偏恐
千歳後或為鯨鯢呑

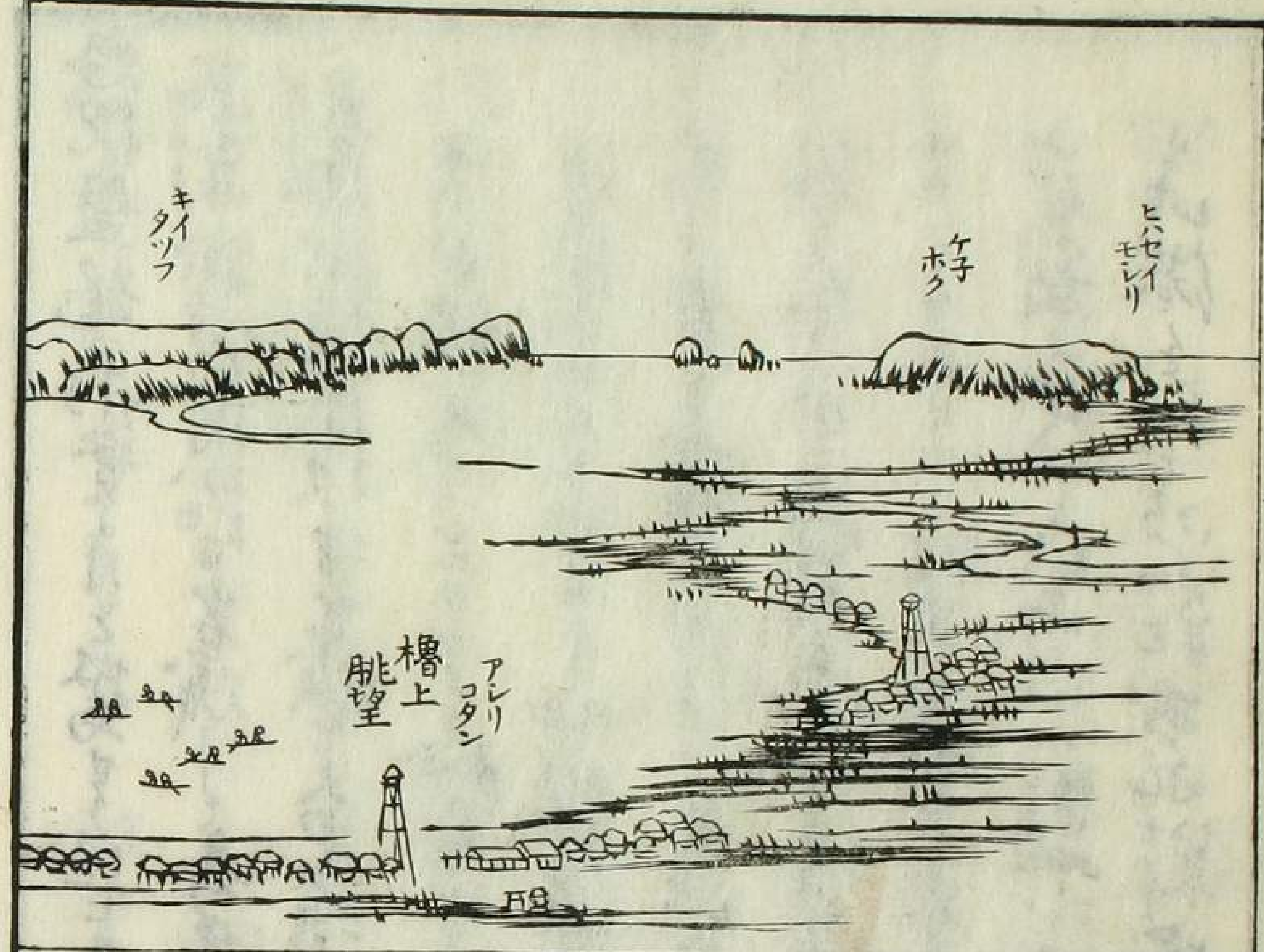
丙辰初巡視
有感作

内山良隆

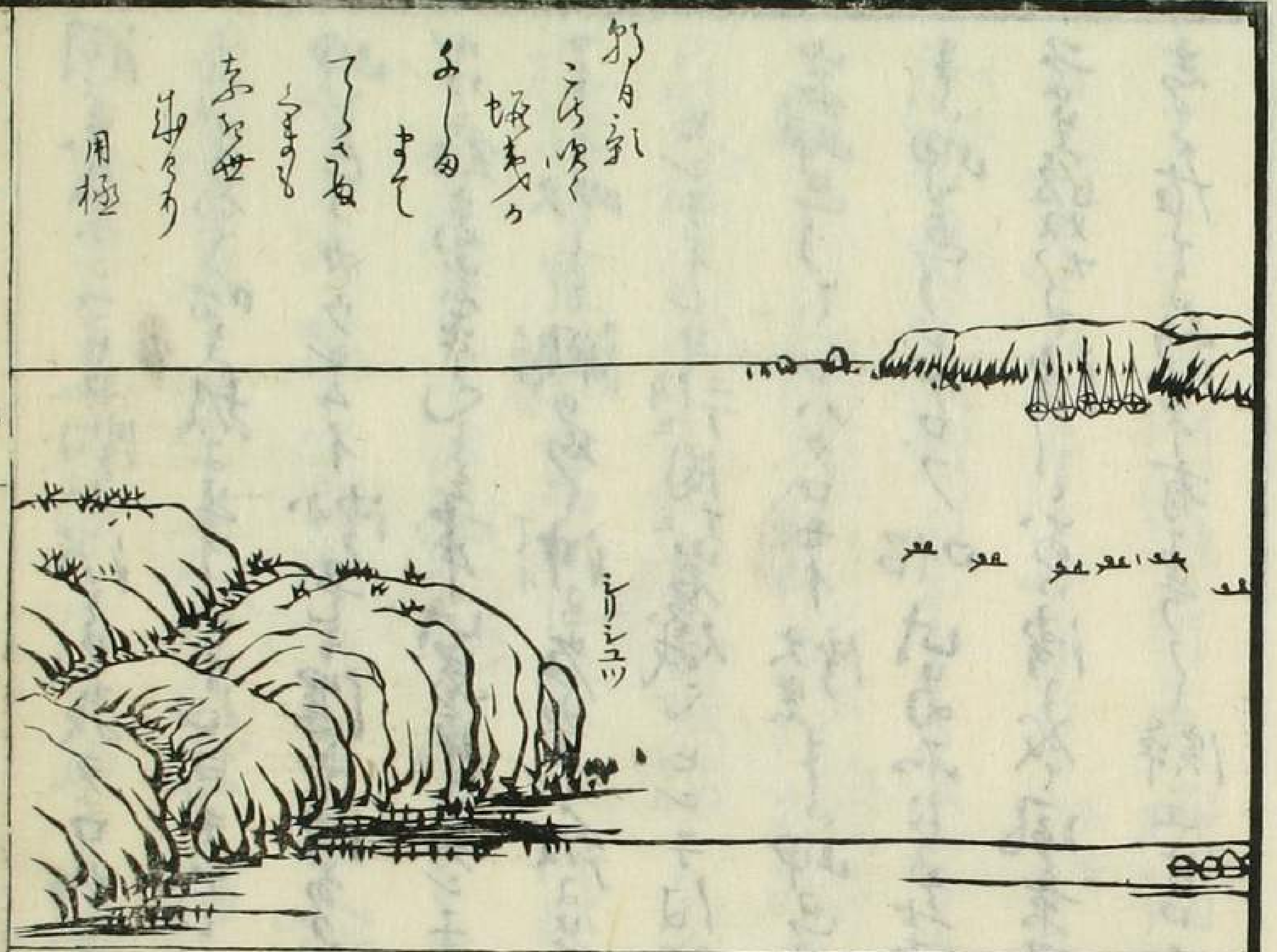


此ヲツキニと云をアツケシの沼と云て敵の首を埋めし処なりとかや墓ヲヤコツと云は
蝦夷ヲニコの木の枝を刺置しが今一圍餘の大木と成て生長せり四國邊路を
巡る弘法大師の杖杉、義経の杖杉等小説に釈尊聖人の杖竹等も
皆しらずも是を編に英雄の志ある者も又しと思へる
天覧すも備りし其の由縁を聞る剛勇家系の者なり　近世此等人物を信する事をも
四月廿日 安政丙辰 擧開發毎年 針位シユマビラ 岩 平 蝦夷となる岩壁其もバラサンの下なり
是やヲチヨツフヨロシヨフ 崖 蝦夷人滿る者の義也アイカツプ 大岩 岬 二ツ出来の義也
往古合戦の時此岬の上に上り軍場を寄手の弓を射てかへさりしと
依て是を 此所ゼンホウシと對を ツクシコエ 岩壁 崖所の名となす義にてエニンカツプ アイカツプの謂也 是より
大岩高岩岬有るより平蝦夷に拠より トウコダン 小川上 に小沼 沼所と云所に出る の眺
望は実に目を驚くなり インカルウシ 小 岬 目入 千年毎しよの義也 此所より十二丈計入有る
故に是るとも唱是てキミセシユマ 礁 此処に壽岩怪石怖れ鮮る如く踊る如しまた

怒觀盤龍の形ち 奇寶に目を驚せりて ヒリカヲタ浜 沙の岩浜といふ義なり
ホンモシリ 小島 往ヒリカ ヲタハテ 周八七 皆岩礁にして奇岩稜々として赤楊樺の殘る一面の生なり
ホロモシリ 大島 往ヒリカ ヲタナハテ 周十八 皆岩礁七大黒島と云ふ東南にラツコイシヨ 岬 岩 苦 樣虎の
島なり由ぬ依て是を レユヲマイ 小鍋 ナベ 島 と云義 往古此の鍋有りしと ホヌシレ 小島 浜
退去る義 ウリルイムイ 西 向 此湾毎に 鵜 の 多きとよ チコシキル 崖 峡 蝦夷とも
岩石身を寫め通しける号 此所に大岩崖ある近辺此氏に同じ柵を
結て人を入る秘境 此中に 石鐘乳 シヤウニウセキ 有と云傳し 深さも志るかし 斧て
ムカイサカイマフ 岩 壁 岩面崖にて界を成 故に号 ヲン子サカイマフ 岩 辛 同じき
大岩故に号く 此ホシレハ センホウシ 領の岬と對して内に波浪穩にて船繫の甚宜しく 異船
此港を知て明和 七年 安永 八年 寛政八年 の度来り 滯留有しとき



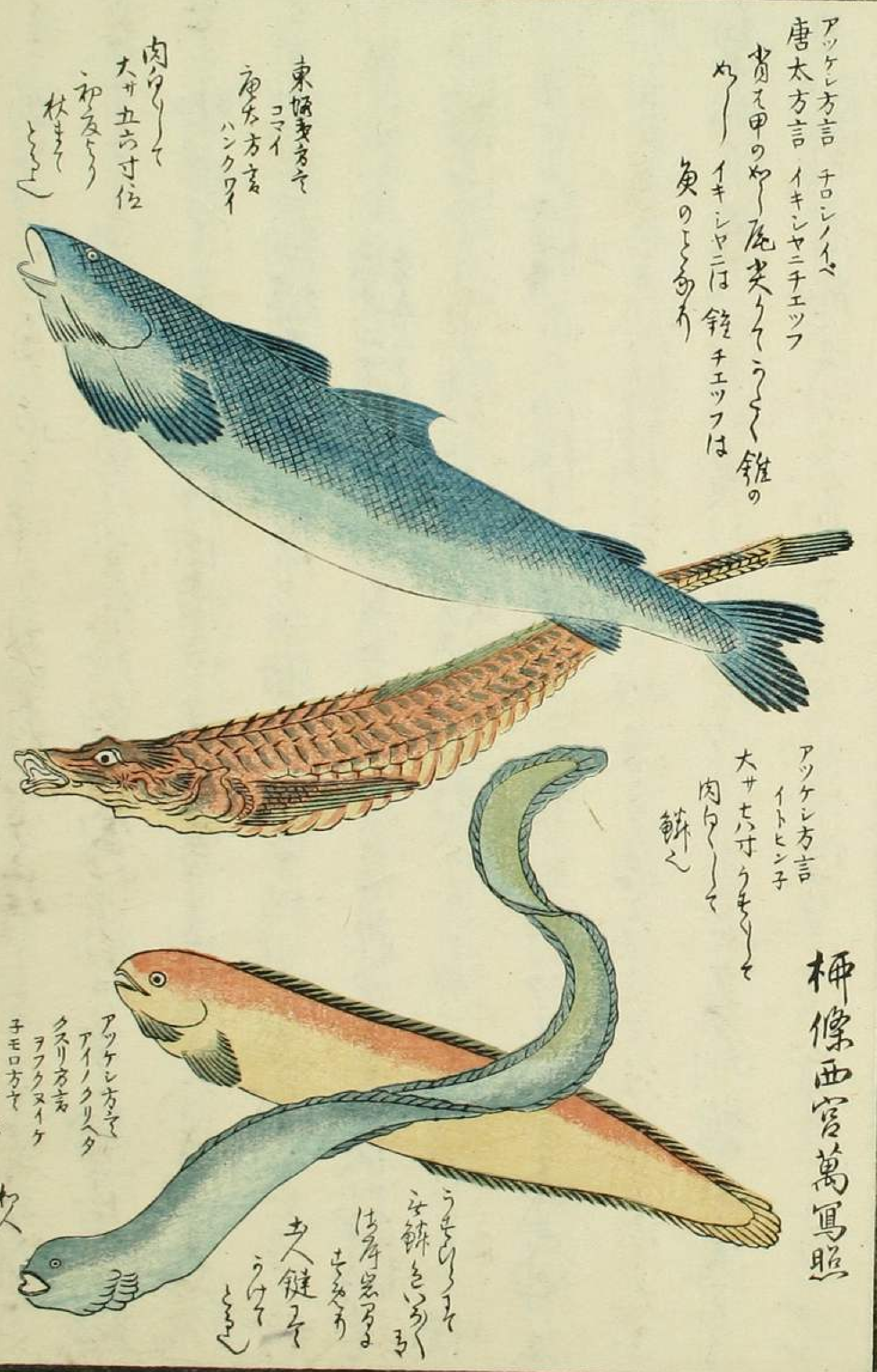
さてフクシヤタウシ濱は茖葱(フクシヤ)取(タ)多き地
故に号く是土人の喰料也 それよりアイハカマへ行道すがら
言ふはキトといへり 此邊より来ぬれや沙金
坑の旧堀跡あり 此山を去りて少し見よ
咊人紫金の濁水流れ出て黄なる鹽(タナヒ)き
草木を照し 実に希代の宝藏なるべし 山
相なり「西人ハ山蒜夥シク生シタリ是當
二其土地金銀鑛有モノ伝證ナリ 野作雑記
譯説 よって金の有る地を葱の類多く
生ずるとや 昔し佐渡の国二河内より



新潟(ニイガタ)より葱(キ)を賣り来りしと 新潟にても
根より砂金を見出すよし それより根の
土を陶(ユラ)汰して大利を得し故に追て葱の
根付よく殖よ 彼地にて洗で精錬せし
かば 誰も買人なく 荒石の金子の多き
地故にかく言を家出て 彼地にて試(カネホリ)に陶(ユ)
汰(ラ)するは砂金を多く得たりと 然に開き
たりしと 実に附ても 此海岸の金銀気多き
を知るべしとや 過てホヌマベツ 小川 小撥(ヌ)
毛(マ)の如き水藻ありて 故に号く マヒロ 小湾

澗と云義ホンマヒロ湾小涌と云義ヲロクン子ムイ湾大暗き湾との義岩岸壁
立てる暗き故に号し イレヨチセシベ号る動くの内礒斗なる故に号るる
岬有 カウシムイ湾是も深き湾なり夕陽向て弟きる故に号く 岬を廻てり
ルワニ岩高岩平と云 此岩平にタン子クツ岩として長常に引如く帯有也 ノツケ
アトイ岬として顋の如く沖に岩出る故に号く 此辺波浪甚し 前に
ヒン子イレヨ 二丁周之岩礒也 ヒン子は膃肭也 此奴に多き故に号くなり
岩岬出て レハクロモイ湾 まで岬出て 浜モチロフ 川あり上沼 此辺に番屋有由
まで岬廻て レチロフ口 沼 此辺不なき時も山峠を陸路まで来に宜しと 此二川
なき路なかりて深しとおいは湾にて風景宜し 此辺住居就まで 鯇取等小屋架
赤て居る故事有と号く 浜 エオロチロフ 沼有 上に楡皮を浸して有る故号く 岬辺

てワタラチロフ 川口漁小屋有 前に岩礒二丁周 号る 又岩壁有り ヒバセイ 川有 此川に蜂
多き故号く 此辺より雪中は トウキタイ 沼源 アツケシ沼え一日に五り位の由 越る由 雪消れとも
葭沼多くして 越難しと云 首を炭山と云て 会所遣料の炭を焼る由 山中椴楡
に雑木しての 熊狼豺狼兎狸狐貂兎石虎黄鼬アツホウの一種 畳鼠木兎 切等に
云ひ支話る 昔より猫変に麝猫なる由て 往く友人猪佐卿の人に判る 竹
枝より霊猫直萬金牝牡遊水潯郎若得準尾賠歌鼓琵琴 常有 後切
羊蹄嶺クナシリの祖父岳に住すると云て 見たる者有し 然るに此和に麝香獣と
云ひて大サ筆箋の如しと云中に多く 華錦嵐毛骨として香氣馥郁として 何
も麝香と思ふ人皆此獣を捕て大利を得んと欲し探求る者多く 異香を
捕ふことを得て来る一頭を得ても 無き竹潭を金を以て 山に入を探さむに 稀



まして此蕈のことを持帰るのこと依て獣を捕らへしにもして此屍ありといひ
窮し余其余を告く彼蕈は黄猫(ホイヌ)の蕈にして余性よく其人弟より黄猫を好く
嵐を吹かせ附ても明らかにして麝香(テン)と猫の蕈と云ふ余一人黄猫の蕈にて
言ても大抵の嘉様是をせんと疑ひしも満足するもの如何にも云ふ余を数多の猫
を散しより此事を闔華言人に語りて同人一様の確證とも示されけ 子ーランド 弁二十一号

マルテル○之ヲマルタと「マルテリユス」及ホイナヒト名ク○此獣形ハ猫ニ似テ足指ハ短ナリ
○茲ニ両種有也一ハ恰モ毛カ黒ク黄ニ光有テ尾ハ白ク○今一ハ野生テ美麗ノ柔毛ニテ
頭ハ黄ナリ此屎ノ香ハ麝香ト同シ 下畧

いよいよ決しより掛るホイナと云は夷言ホイヌの轉きしる此地より
出しよりも満の豆り後西小の方にあり物ろ韃人好て此皮を前る事も次う見へ
是小地(カラフト)產の黄猫と称ても文異なるなし然らは夷地麝香を産もるの説とあ
蕈より起りしもの如此一様の小説は心を傾くるも窮の山澤は心を附さる事や

花の香のあるものを首にかけて村の素木はこれにて拵ふ

エモコモイ 同じく ナヨテ 昔は島なりしが今は陸続きに成りて南メヲクル 大岩 岩 テモイ 立岩

此へ出て ケ子ホク 大岩 岬 依て此島をケ子ホクと云ふ。赤楊多き故号して 云ふ

ブレワタラ 同 テ 此岩とケ子ホクの間に船入りや近き湊の様に成し まこと 云ふ

キイタップ 同じく二つ有る上にて 岩屋二ケ所有る 石は上に平にして草生茂りしと云ふ 又祭有る ヲトヒ 湧出し

故に其有る名なり 岬 西ハエキシヤニ 大岩 岬 是より南へ廻りトウブツ 南方 小湾 シレトエ 岬 東

ヲクシ 岩ら 小湾有る 此辺砂浜にてアシリコタンと対して船澗と成し、是より東は海中よ

エタシベエシヨ 岩 岬 小浜 磯の岩を ヤ 岩 岬 等云ふ島にて

扨是より内へ入りて 左ホキシヤリベツ 右キイタップ 浜に川 舟子向ひて砂浜也 ホキシヤリヘツ 川口 此辺より大なる

貝 ホッキ貝 甚多く 有故に是をしるしてヲタノシケ 浜 砂浜 砂浜中と云ふ義 安を アシリコタン

と云 岩屋四棟 板倉八棟 夷家十三軒 社一棟 是領場所と云義にて其家建て此へ出る外の根 子

モロ 諸子会所の跡有りし時彼地の人民等を養ひて此所より船積せし由にて近

頃迄モロの様取船をキイタフ辺りと沖見へ頗る景なりと云ふ 今は番帳

面等を貯ゆる蔵有し 此辺 鯡 鰯 鰊 鯡 コマイ等多し 極へ入る者 サル土人と共に地

形は皆向ひ浜にて義 湿地にて到る 上平山 椴木多く 鶴鴨 沼等有 此辺より 是より凡そ半

一つ町ばかり荒き砂浜にて 此辺の名根は高く 子寸余 白浪

其甘 地満森深く 他人の皆ずまる 化して舟を廻して キイタプの湾にて今是はコ

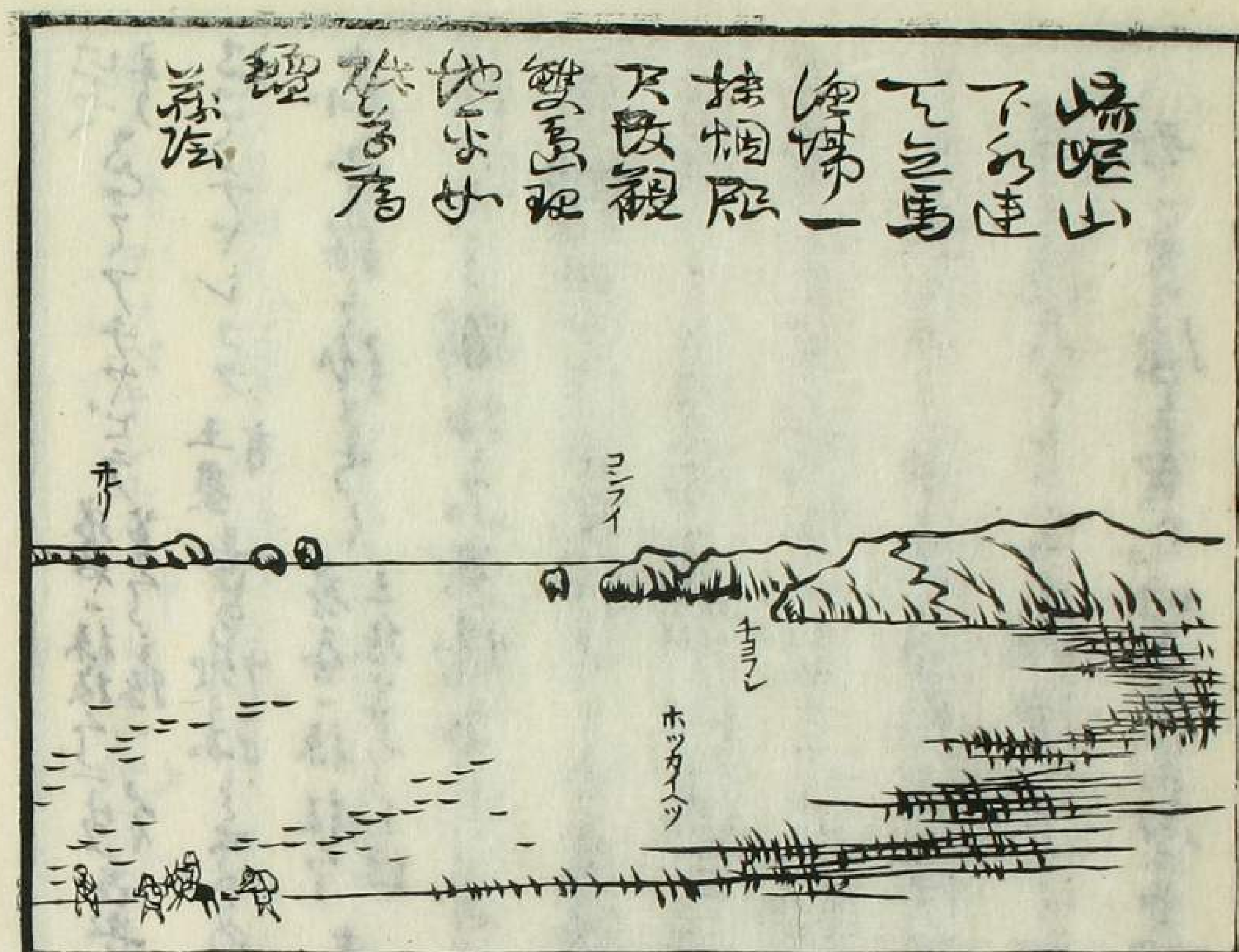
マイ 又ハシカイ カラフトキウリ 其て フウラチエッフ 山出て アラコエ 此の大漁 奥朔日の頃有り 而して此号して

と見へ 此より中よアイノクリベカ イトピン子 チロシノイベ 等云ふ魚多く取り まで

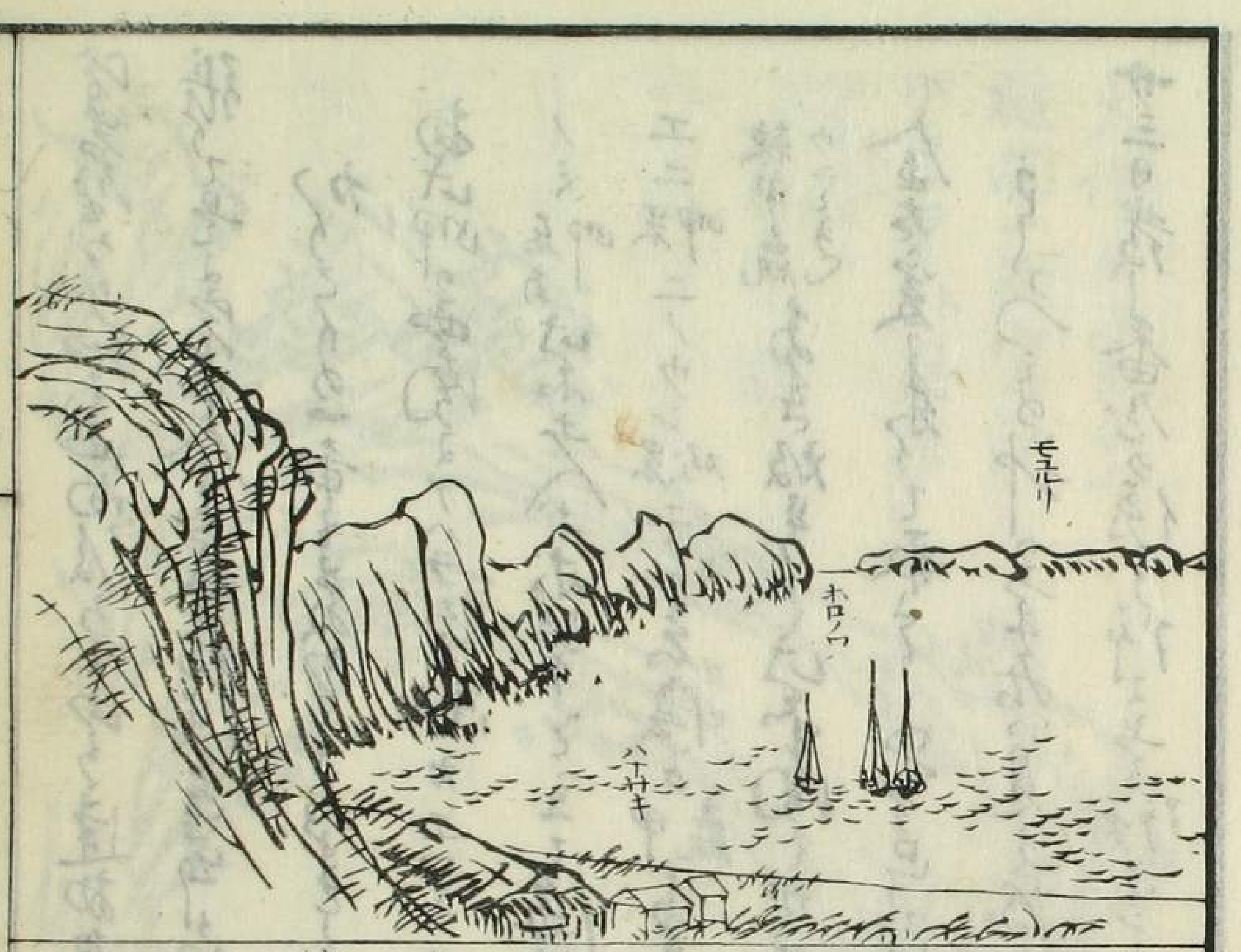
海岸よ 様との海から沖 澤山居て 碑石菜 多人住し所と云ふ 船来の為よ カイニンサウ

勝負ありまし異なる中別して黒き巻丹朱沼蘭を咲ならしむるは エトピリカ 鼻美
海鳥等なり ヤエエトピリカ 大さ鶉の如く色黒く首赤く背目ふち白く濃紫紅色也 ヲシ子チカプ 大鳥 鶴に似たる
其余の鳥には様々有 キウリ、ヲレタラ、ツリヤ、フーラツトリ、カ、キヨ、フウセチリ、
ヒレカ、イトクトキ、アイスヒヲリ、ヲマシルイチリ、ウエレユツフ、ハケクレ子、ウエチリヲキ、
ヌツフカチレフ、ホツキウレ、ウツセトイタ、ヲツヒケヒケ、ヲルレアツケウ、ハイトツフ、アヲリ、
コロカツクシ、ハリケウ、アチユイチカス、ワウヲ、レラルツ、イツラ、
ヘカチ、リ、ヤウレタラ、ホヌチリレラテキ、ツラ、
フレレヤムチリ、ホルチリ、ヲケウラ、コベツチヤ、まつ陸にて異なる フウレチカプ 赤島 の如く 大さ鴇
常に多く背藍色鳩より丸き サルマシコ 是れ流なり 中地 アツケシイ、トコ 原有りて 亦た白く
尾を伸して人日の丸と云ふ カ子タ、キ わ流しホく鉦を叩く如く鳴る事 シイシヤリタマヤリ 大サ鶉の如し 其余
とて深み也
寿多かりし中より見るべきこと難し 多方陸中島に足る事有る
廿二日宿を発し満潮く泥深く世界と云ふ海浜 ナヨシリシエツ岬 大岩 九ツ程有り 此上を越へて行
見ゆる下 ヲツベキシエイ岬 維古地名にて一度の人家も有り 此より東へ 太子道ノコヘリヘツより

此処より アチヤビラ 常に一株枝分れ二株 往古土人の岩を鍋として居を構へし故也
過ぎて チヤシコツ 土塁有 古の城跡と云ふもの有 ルイラン坂 と云ふ坂あり 此義下 ホロト
ウ小川 小さき沼に依りて 常に一株枝分れ 千株茅くさ三株 是れより ホンホロトウ小川 越えて平
山より出る 榭柏木赤楊多し また吉利子 エノタンネ 椴荒 樹木州一面に生ずる 外ブユウン
チシ 大岩 岬 穴ある岩にて 依りて多く 上より岩蓮華の大さ一尺余りの如く生じ 実も有りと
云ふ 其余岩の 樹州 浜蘭 ハマナツナ 一寸外のもの多く 鎧を着る 近来は 兎 云ふ
目貫くて見る所 下を ウラヤコタン 名義 此川にて 栗 ウラエ モウヒシ を拾ひ 故多く見る
また丸ヶ程 と云ふ 平野 其榭柏多し 此より南向一大岬 に行くより
見ゆる海岸 を レツハムイ岬 岩 沖の湾の義 ホンチエツプホプ 小湾 ホロチエツプホプ 小湾 小ホ
先は東の浦と云ふ義也 此より大岩磐有 一岬 とモエレトマリ 小沼 また 岬 出る



エチヤシト 小川 此所より岩石の出たる所ゆへ
平地少く大小の岩石の上を越て難所多し
小川二ッ越て 浜辺南向 ウシヘ ヘツ川 小 サシヒナ [illegible]
有 又是より入坂を登る 浜辺は岩
壁にてチフラムイ 小川 此辺の船渡と
云 又是より ヲワタラウシ 小川 南方岩岬
の上を通り アフタウシ 小川 両岬を大岩
壁の[illegible] アフ [illegible] 又坂一ッ越下り ヲフ
子プ 小川 浜辺 [illegible] の岩岬を越て
チシヤシラエツフ 小川 [illegible]



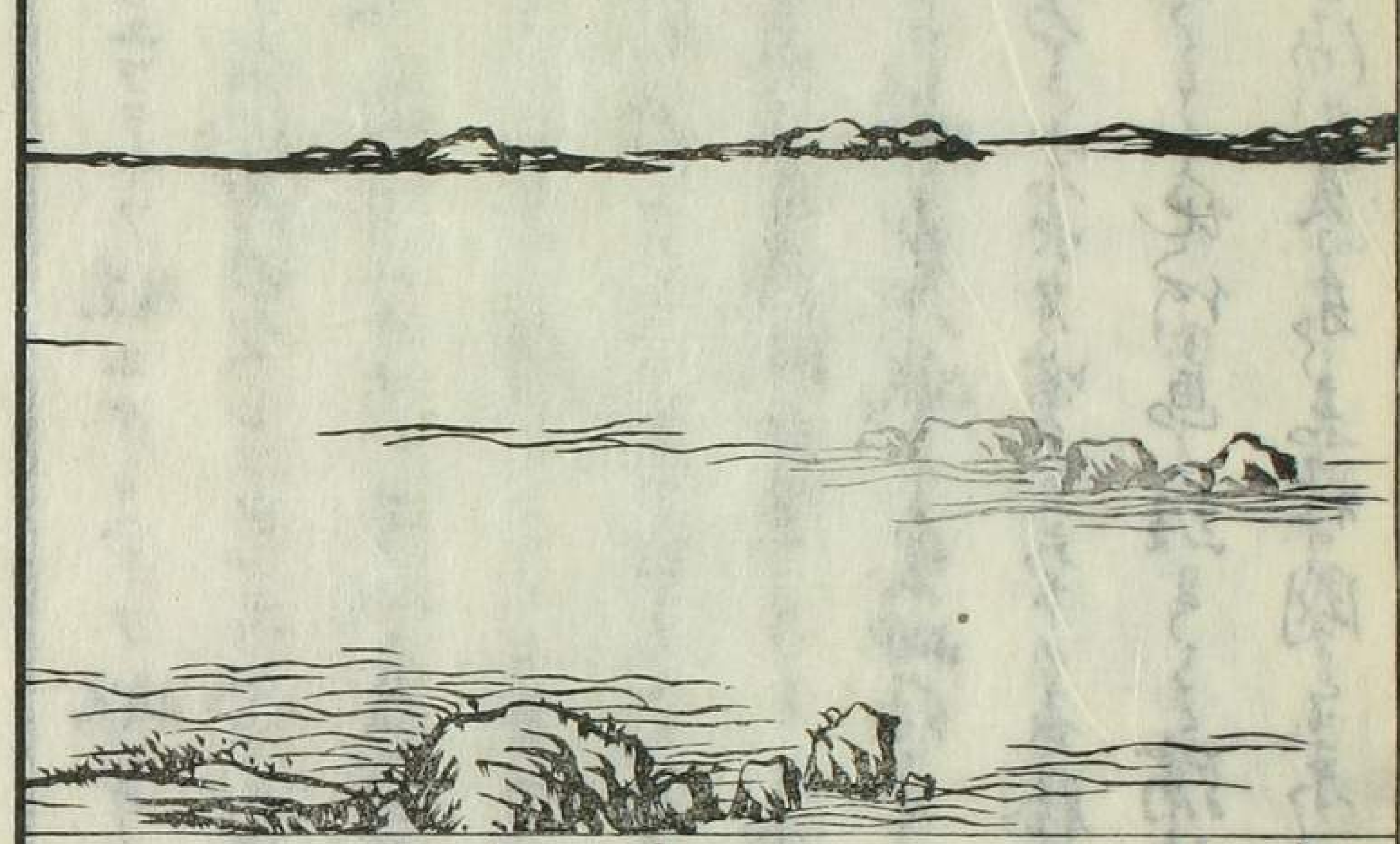
[illegible] 又岩岬の上を越て浜辺 [illegible]
一峠を越 [illegible] は [illegible] を [illegible]
を跡に [illegible] キナシトウヘウシ 小川 [illegible]
[illegible] 蒲 [illegible] フウシレユマ 岩 [illegible]
より陸の方は山道 コタンコアンヘツ [illegible] の
[illegible] 入口にて ホロンタイ 小川 [illegible]
[illegible] アラヘヲマイ [illegible] 水
[illegible] 浜 [illegible]
ヲツチシ 番屋一棟 板蔵一棟
茅蔵二棟 大小 [illegible] 一ッの
大岬 [illegible] 周廻二 [illegible]

清岩屋より地を西向後ろに出る達勃出て磨きし故侍の大岩窟に古遺を
張りて是を宮に金剛静明演出出し小笠に一まる小貝を拾ひ帰りぬ
かくるりの一重もまたかて之あまりも世の庵かりへまかりくもなし
扨此岬の西南にアハラムイ湾(小) カエワタラ岩(大) レタロカ湾(小) ノツノレケヲマフ岬(南) イ
ノミ岬(東南) 此辺土人かの木幣を立て海神を祭る所と依て呼く エウエニ 東ウ
エニ岬(岩) ニノウレ岩 戒二ノを石隠子 甲蠃(ガゼ)あまきら故呼してアレユンテウン岩 磯靈蠃子
棘甲蠃(ウニとなづく) あまき故呼し此辺南をガゼあまく小ぞノナあく産るも奇とも乙
金太変来りて取ゆくと云ふ日にて湾に入(南屋の小屋也) 此辺東南を船路とゆく道
とうつるの神の宇多は貝之類るもたるかかりりいるもとし路れば
廿三日発し番屋の傍より所々岩石 ホントウ沼(小) 東西 ホクレヨ湾(小) 白里班有

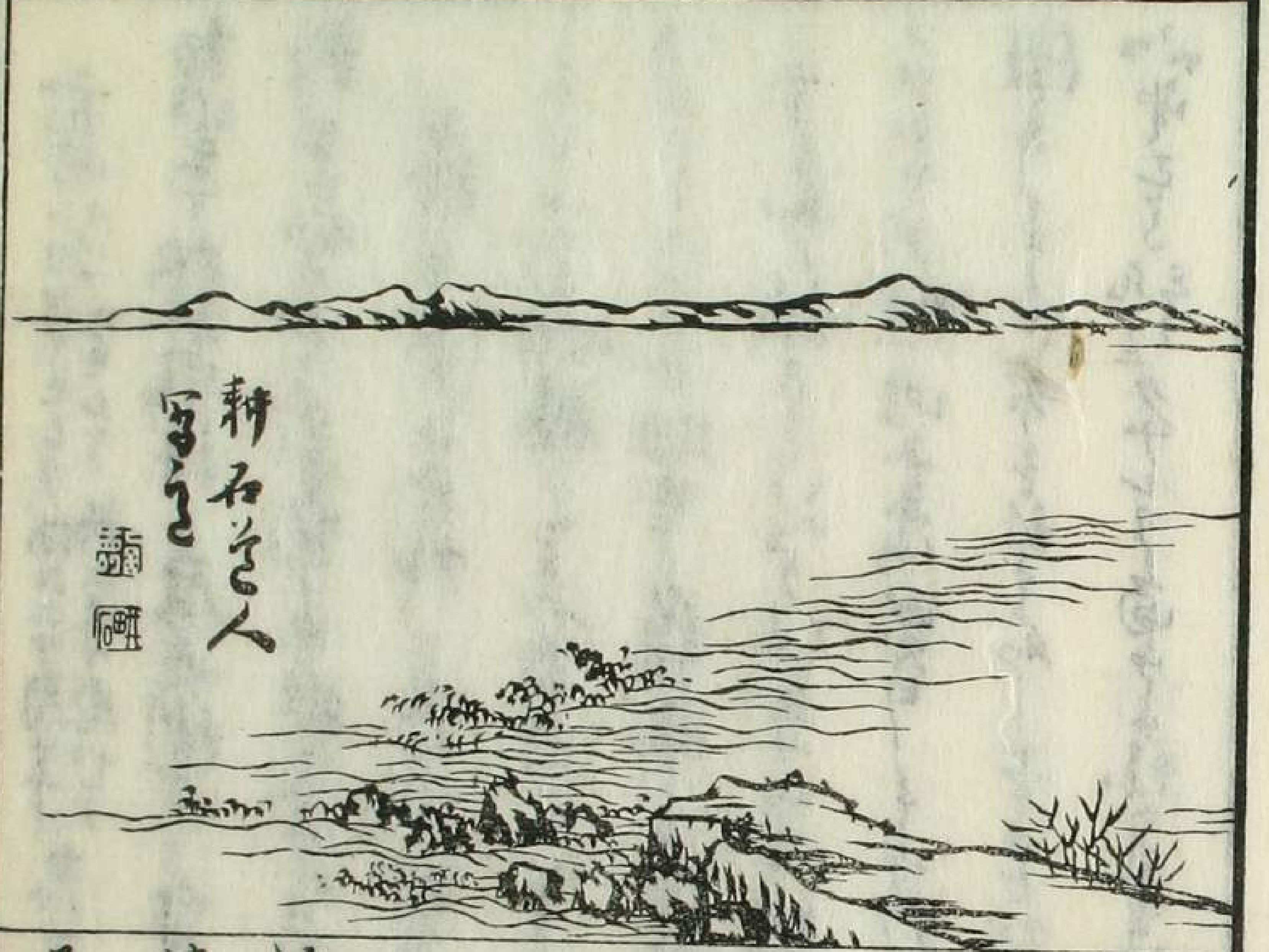
天借巨靈手
雄開一面窓試
望千里外駭浪
響淙々
松園道人

水約多く有て数は多く又是よりホロノツ岬大より下岬の上を下りエユムウシ 番屋 茅屋
此辺雑魚の漁をなし出る所なり又ホンノツ岬大より岬の上を越コンブウシムイ
番屋 板 茅ぶき 此浦は常に多き数多くありて浜中をヲタノシケ川小わたり中を義ゐて坂
の下は標柱 従アツケシ二十一里二十六町 チヨブシと云 上は沼なり 往古は中一本の立石
ありしと云義く是より子モロ領に属し浜形東南向
岬を越 浜 ヲツカエヘツ川小 抽を背負 杉半して ヲホサツナイ川小 往古は神の御神 流来
来りと坂より此上は嗜士(イエトイ)かるもしと立え根木立有り 今は及千半余 従是子モロ会所へ二り
もかしたま名つきや始め荒磯よりもれ小浪のむさきの浦
ハナサキ 番屋 板茅ぶき 是ら松鼻岬ある此所南向東は岩岬 雪はチヨフレと云一湾前
二島 ユルリ 周二り モユルリ 周一り余 を海上二り斗に見ゆる 周皆岩壁船渇あてよる遠し 行て

キナシユフヲマフ 岩礁 エタシヘイソ 岩礁 何れも土人小秋の漁場なり
昔島は文化度此所へシコタン土人を引取漁猟をさせ今は是を居住ホニ
ヲイ元 会所 は梅 ハナサキ土人を受けありし実は皆シコタンより梅住の者
にて此上の和人皆野雑ホニ子モロ会所へ陸路成り有岸 より会太会所へ
あまり土人を頼み其世して月の出るまで乙名トミクワを百年一酒一樽を持参来る
廿四日晩風なく岩務舟出し上より島の名のノヲ大ホロノツ岬小 ホロノツ岬大 上を越し 凡乙十町
ヲワタラウシ 湾小 南岸磯なる岩岬 続て是く有て カンサラムイ 湾小 大成なる湾と云
併て高き岩穴有家は天下の奇勝にて エヌエウシ 浜小 詳に此所来るや杖
を捨て手地へ行廻く坂ありて 浦従まで至りて ナンブトウ 沼小 有し南
部人漂流して家を来り 素雅の風なく来り心を生涯留りしと云坂あり 行て アンチト



ウ沼小細く尖り沼の前ヲン子トウベツ川沼上
ヨ沼有トベトマイ川沼是迄ヨリ一丁砂地くまで
前の方上る岬をトモシリウレノツ岬小と云前
トモシリ　大周十五六丁小周名義二ツ島と云　ナニテ周十六丁
前トツフモシリの続く
此島風強き故柳樺の生茂り頗る
角島より我等形を鈎髪のやうにして
甚危し　ト　ポフケセンベ小澗　此辺の曠漠
の流る故見るにヲケ子ベツ川小　来楊生り
ヲヒ子ヘツ川小　シケウシ川小　此辺茅人家なし



の為抱く上り故よ見るく上るよ土塁跡ちて
陶器之欠根石を出して　フンベケウニ岬小
鯨の縁骨を有りしと云　フラリムイ澗小息
辺の有澗と云前チヤレコツ土塁岬より
上りヲヤコツ土塁是は古の城跡と云へき
イソ子ムシリ　周九丁　周岩礁之　ナヲヤコツムシリと云
ハボマイムシリ　周十丁　周岩礁之
海岸眺望此辺岩多しマカヨシレト岬岩
落葉も多き故見るくコヨマイ平岩
又ヘ新波よ音高き故見るし新よ

二島 ココマイモシリ 海上二丁周十丁 カバフケモシリ 海上五丁周八丁 カバフケは浪の被るといふ義なりと
相伝ふ 波や風雨の度吹倒さるる事有て深浅の方に晴陰して一嶋と
顕はるるかくことの有実其観く 又は馬の背をわたることくにも思へる
霧ありて 芦野の原を分けゆく如し神代の事とも見ゆ
トリトエウシ 周五丁 縁まで手の届きさうに見ゆ 今は皆芦原にて 樹木一本もなし
十丁 コテトエ、イソ岩 周五丁 芦 鵜を取てあそび 又一説に岩の所を両隅を延
て 五丁 ヌサウシ 十丁 エナヲと 是則 ハナサキ 八丁
ノツシヤブ岬 弁一時不来海実ありて岩様海中一里余出る故に白波是より
激て来る近布を乱る如し 土人芦原にて来るに火をつけ霧の晴るを待て
小舟を出す 凡十二 クナシリ島の事は 横に見ゆる 異の方には 海上一 里余

ヲ、トキ 周十丁 岩礁の上 五丁 モシモシリ 周四 まで ニアキロ、周四
まで 十八九丁 ユウル 周、 二十 ハルカルモシリ 周六 周 モシリカ 周四 まで
五丁 イタシベイツ 周 水獄中 土人 海 様 従是
岬 海上 二り 此湯門をクナシリ、エトロフ、子モロ、行の舟を通て晴陰もよし
ヌイシヤウ 周 ニイシコ 至止磯の内島を獄至り 周四丁 小さ
ニ 方海上二り レボツ 周八 シベヲツと 鮭の内 東方に小沼あり
船を 宮にて 四丁 タラク 周六 本名マクイある 是浦を
のとし 岩礁滑りある故に見る 共に樹木なし 七丁
シコタン 周三十 四里余 至て極り所と云 是東の果なれば 海岸岩壁
のめつ 平遍にて 樹木立山中 草 周四小 船酒 所

西マヽイ 小アナマ トシカウクト 文化度に番屋運上人家も有りしが今は廃して今来るに於て二
百余エトロフ之賊来りし時アナマトに船を寄せ三日程滞留して其類を鱗鰐鮫
鯱鱣鱓海獺其外雑魚を以て彼は一様の物を貪りて余る所なく食尽し
きる事也嗚呼此一島の土人と云ふに至りて宝島より出て一万の情今他よりも此地に
有と云へ共本土に馴れる和病を生じて患らふまま此浜宝島半の生時分外夷の
憂ひ土人と子モロに有きとて悔る共取えゝる雑り出願ては此地をぞ去れ
赤の老翁はる月に其親族を携へて人も来りと抱きて往るに此雑の棲を悲え
ころつくる汐風の中にあひいそけれはけもう子島の数多人へり有
輾時共子仔まてるに身凍其り小岸を雪雨は来るやは海鳳を以て悟
類を裂罷如し岩を撃波浪も湧し凍て尾花の招く如く見へる有

又此崖は数丈の氷柱滴りて千年の翁あらんかとにもぞ此は風土の異なるを感じぬく
来るまに コエカベツ 小川 浪打川と云義 岩 てコエカノツ 小岬 浪越る岬と云ふへウチヤ
ラセ 小川 崖瀧と云ふ義なり ホンモト 平地 ヲシ子モト 同 やくに半砂之家も建の
岩と跡なし チヤシコツ 城跡 ホイナヲイ 浜 平 小岩あり石の義 岩 てカアネフ 岩
ちん相ち尖りし大岩海中に突出して ウエンチヤシ 城跡 足は悪き城と云ふ此方の
大なる岩て造去りしやうなり 岩 てチヤシムイ 小澗有て梯木来て入下に安
のまくと日も傾き風浪さ殺岩るあまり寄きさ岸は急きぬるにコタンケシヘツ 小川 人村
端川と云ふヲン子コタンシレト 小岬 大村岬の義 茲は此出て人家も有りかり由ヒリカヲ
夕 砂 大浜 の義なるトウシヤム 沼口 沼尻の義也 西岸に越て蔵の下の小屋郷の風浪に
宿る 浜 ノツシヤフ 然るを北を過ぎ外を人て探りしに岩多く少の陸くる有故思と以て

維辛維苦嘗舌嘗來
乃獲異卉味美於回
衆救饑餓其功偉哉
穡輭之草彼何人斯

甕江川田剛題

敬齋精義書

乾也

飯を炊き啖ひしが潮辛くして咽喉渇きければ水を多く呑みて甚だ困りたり

沼周廻凡そ二里余源はサキペンベツ太レペンベツ左とて二つなりサキペンベツは谿多くレペン

ベツは難なし又沼中蜆蝲蛄鯇小貝多くある處一面に貝を敷けり

明けぬべき夜の一夜も神わたつみの海くだしやすき夜のこゝろせねばなく

舟よるべき神わたつみの里しなきあれたる藻かこち夜泊めかくもせん

曾て小風吹く飯を炊かんとして岩間を見るに潮満て何処にも走れず漸く依

太郎は飯をたきせしが トウエチヤシコツ 城 下にコンブウシムイ 小湾 ヲヘ

ツ子ウシ 小沢 此所に番人家有り時に蕁麻を洗ひ出して見るに甚だ多し

此家も夜深き故に衣被身に附て甚だ行悪しき故に防寒に葉を被り酸

摸葉を腰に纏ひ是を見て夜を拂ひ衣服身に附て宜しきまで數日採

も浴せし髪も乱れ破れたる衣(ジャンベ/キモノ)擬肩て此葉を肩腰に纏ひし抑え憐なり
青化物の如しと土人等も嘲り自らも後の記念(カタミ)にと成さんと手冊のもしに自画き置ぬ
去てシ子フル二岐 岩 此所番所有て羽ツ下り磨り抜けてニシヤムコタン 岐 平 ホンヲニ
ヨフ 岐 岩 ヲニヨフ 川 此辺で腹も空き咽喉(ハンド)も渇(カワ)きけれども心附て土佐の國砥石(トヒイシ)
別石(ハチイシ)ならで石の如くれは虎杖(クット/イタトリ)の蔓を取て皮を剥き喰ひ又糠と捏て漬て
喰ひしを思ひ出し此日迄其まゝ食はれ共是を折て喰ひけるに頗る能く當り
まさ酸味有て湯にも凌ぎ宜し土人も此葉を如此まで喰ふ事を知らしと語て
知らざりしと云へり此蔓をクツタラアマヽと云 虎杖米 酸模(シユナバ)をシユナバアマヽと云て飯に焚きたり
し余も夕張(ユウハリ)シコツ辺にて喰ひしが土人も如此の験窮して蓬の喰ひ
物なきを何となく糧に用ひるに依て蓬をアマヽチカブと云へりと 飯 鳥 チヤシコツ て

此せし土墨うる榎木の土器出しにてラホキ 小沢 臓腑の下に云へるなる何故に
是らや其みて ノツカマフ 岬 小岬也とのみ此所番人家有り 寛
政の頃より今の子モロの如く栄りしとの子モロ土人とノツカマフ土人と古帳面よ
り認め有之由とや演形开夹向ノツカヲマフノツ 小 岬 と云 て イレヤウ二 岩 島 山石
礒なる殺し是つくシキムイ 小 浦 漁にて宜しきなり甚高し上るより是くて水を見
附故飯を炊て喰ひ ビウチヤラセ 小 瀧 川 放して是くコロクニウシムイ 小 湾 款冬
あき浦の記ホンコタン 村 此 ヲンネコタン 村 此 大村小村の記前にカサ子カ
シユマ 小岩 島 能ら笠故に是つくる 島 沖 中 位 行 す 実出し 汐干の時見え 岩
の上を危越 別越てりましこ 危石をシユマリウカ 岩 と云て 岩橋との義
此辺迄人信し灰白の如く其物の如き物有間カ

神箸モイハシユイと云ふもの皮を剥て白くして内外とも見事なり越へて餘暇(ウシヤナキ)經目之須臾
のうちに坐して木の如し土人の話にては岩に生するものとぞ沙箸生于海岸春吐苗其
心若骨白而且勁可為酒籌凡欲採者輕歩向前及手拔之不然聞行
者聲遽入沙中掘尋之終不可得也 嶺表録異 とあるも是なるへし沙中に
入物と云ふ是を亡羊山本先生の品考中に 沙箸 嶺表録異 越王竹 南方艸木状 越
王筋竹 竹譜詳録 沙筋 福建通志 塗釵 同 等の名を挙られ實に博識と云ふへし是此
地にては岩に生するを見されは権とし 波に漂ひ砂に埋もれしを
沙箸の名有も宜なる哉 根元に此毒を含めれは毒解にして又薬にも用ひて剥き頭
痛を治すとも云へり ホロシユナハウシ 小湾 シユナハウシムイ 小湾 出る美歸
根ぬきて程よく起て ペトル岬 小 ピンケウシムイ 小湾 崖際に義 此岬に塊設有

是より子モロ湾に入る 湊形 西向 波浪甚く穏かなり チヤイフンテカヲムイ 大湾 是は
極寒度湾とも云ふ義にて子モロへ小川出て湊有云事 泥トウシヤ 前に
ホロモシリ 周九丁 海上廿丁 今大島と云へり 上に弁天社有 又大船碇泊し酒まて有し
子モロ會所に至る 先あるを稲て酒を呑 湯なる所は船繋の所なれは何
地と割に入る所に伊勢殿の事なり 土人云ふ 會所より二里 東南ものなる級に
ちちを見て是に木綿を添へまし 夕方一同にて首長陳平(トミクツ)宅に到り土人(ドン)
ドンと云ふ者を呼 此者は戎錦をよく辨し 聞は是を乞し 一同の者一樽の
酒を與へ 樽前にて見サイナく戎錦 ヨミサイナと雖も 是にテンキと鳥
帽(ボウシ)子を着し 余か羽織を乞ふて 是に襟を添 手鞋を抱へ錦羊
肩にして辨始め種々の所作仕舞て後に錦羊を樽とし 舟盪場に至る

審くるをあまた年實よ言よしたるしか千島の渠魁まてそ都の手振の殊なる
事共精くしるし筆の及ぶ所は夜を日に継て橋本悌彦近茂善之丞の二君
をも顧みず知床(シレトコ)迄のことを頼るとありけり二君懇よ之を記し傳藏松田金にも授て
命ぜられ何の不足なく用を調へ此場所の[illegible]と云
又松前の別る船のまた絶て[illegible]散と一首の短冊を席(セキ)の
[illegible]也
まり帆の帆[illegible]出入[illegible]賑しき男も[illegible]郎
納紗布日誌　尾

竹潭喜多野氏志古覃日記

壬戌臈月余與塾生日課記事一則一日見喜多野省吾國字志古覃紀行於几上乃翻譯以示諸子使其取法焉云　穀堂學人宣識

志古覃夷言極處村也以其在蝦夷極東海中故名先是松前侯移土人于根室港之花碕為空島數十年今茲安政丙辰余祗役在悪消秋七月得報差巡視焉蓋　官欲再置漁戸也初四日抵根室艤舟酋長烏啞差比原志古草人乃命引導

初五日平明西南風開帆用夷禮立木幣于鷁首禱海路安

全。巳時歴納紗布岬。東踔四里。抵水晶島。重霧四塞。咫尺不辯。乃鎖船巖間。登岸。檢時規。僅過午。

初六日。用寅卯針。揚帆。雲霧忽歇忽合。變態無極。抵恙勃通島之登根別嶴。崖土有赤有白有紺有黒。斑爛作纈紋。差午出大洋。南風大作。船傾側簸蕩。衆皆眩暈嘔噦狼藉。倚舷而望。四面浩淼。無島嶼可泊。萍飄蓬轉。一任其所之。忽見一島于良位。轉柁赴之。巨巖盤薄于鯨波怒濤之間。傍多礁石。一誤則船粉碎矣。衆相顧失色。入夜風少定。展帆東駛。初更達多羅久島。繫舟登岸。濕霧如雨。燭火屢滅。乃燒枯枝敗葉取明。

初七日。平旦與松岡徳松村精。巡視島中。無大樹。岸皆巉嵒。往々帶青綠色。光瑩如孔雀石然。

初八日。暴雨驟至。避于巖穴。寒甚。御綿衣。舟中水且盡。派人覓泉。不得。乃堀地出水。煤色。以巾漉之。有臭氣。

初九日。微雨。銃海獺長丈餘。未及收。飛濤大至。忽盪去。可惜。際昏。徳獲鷲一隻而歸。

初十日。颶風。夜半收怒。纖月在空。明日天氣可知。

十一日。開霽。解纜。南風側帆。東踔。望洋面一白如雪。俄頃潮來。其鳴如雷。其疾如馬。狂乳奔騰。裹駕蓬脊。蓬霤如瀑。船傾欹將危。舟人惶恩失措。徳曰。潮急如此。請一還于多羅久候

順風。余曰。何日無潮。且海路既過半。今而田帆。是癈前功也。
舟人奮激竭死力。劣能過之。日晡始見志古覃島之佐喜宇
遠別嶴。樹木可辯。既到嶴口。濤高不可得邇。傍島南入阿摩
麻比灣拋錨。岸石磊礧。皆欲動。諦視則水豹群聚也。其啼如
赤子。又多鮮。手獲百餘尾。
十二日出灣。過麻宇多阿比羅烏度流諸岬。此間平岡漫嶺
無大樹。抵佐喜宇遠別。島形一變。峯巒突起。瀕海怪石攢簇。
或蹲如虎。或睨如獅子。或聳如豺狼。或如人立。或如渇牛怒
猊。或如鶴啄鶻落。龜伏蛇盤。千狀萬態。不能盡述。轉入敏寧
志豫灣。一山皆鳳尾松。懸泉數條。隱見樹間。白光閃閃。奪人

目。鷲鵰海鶯哥見人驚起。回翔空中。不知幾千數。歷遠羅勘
遍。泊阿奈麻力灣。
十二日。弗且傍島北。歷麻多古覃。夷言冬村也。抵射古覃夷
言夏村也。舍舟登陸。有草類燈心艸。細毳密布。如鋪青氊。多
古墳。洒酒祭之。文化中有太郎者。以勇力畏服土人。自立為
酋長。更有并呑根室惡消之意。惡消酋長伊古登比有膽畧。
欲除之。乗小舟来直過其廬。太郎素相識。具酒饗之。伊古登
比始入室。挿匕首于簷端。酒既酣。急起執匕首。刺之立斃云。
十四日平明巡視。有聲震地。如大砲連發。衆驚以為洋舶進
嶴。令人見之。山崖崩數十丈矣。大樹皆合抱。撐天蔽日。其下

敗葉重疊。行葉上不知究隆。一失足幾墜深谷。饒狐與他種夐異。面短身羸。其毛或黄赤或黒白。有二色者。有三色者。純黒者映日為金色。尤美。夷人與滿洲人交易。以此為上貨。王士慎池北偶談云。玄狐惟王侯以上始得服。則其貴可知矣。

十五日發射古覃。歷度加理宇多知呂毛志利惠麻菓古通計。久伊保泊。古覃計志奥。是為島南邊。較北邊覺少暖。是夜有火熒熒起海中。散作數百星。如近如遠。至曉滅。或云大魚目。或云壚精。未知孰是。

十六日歷登伊度古。麻麻比。還佐喜宇遠別奥。周廻凡三十四里。大小二十四灣。皆可泊可漁。事既竣。約明日回帆。

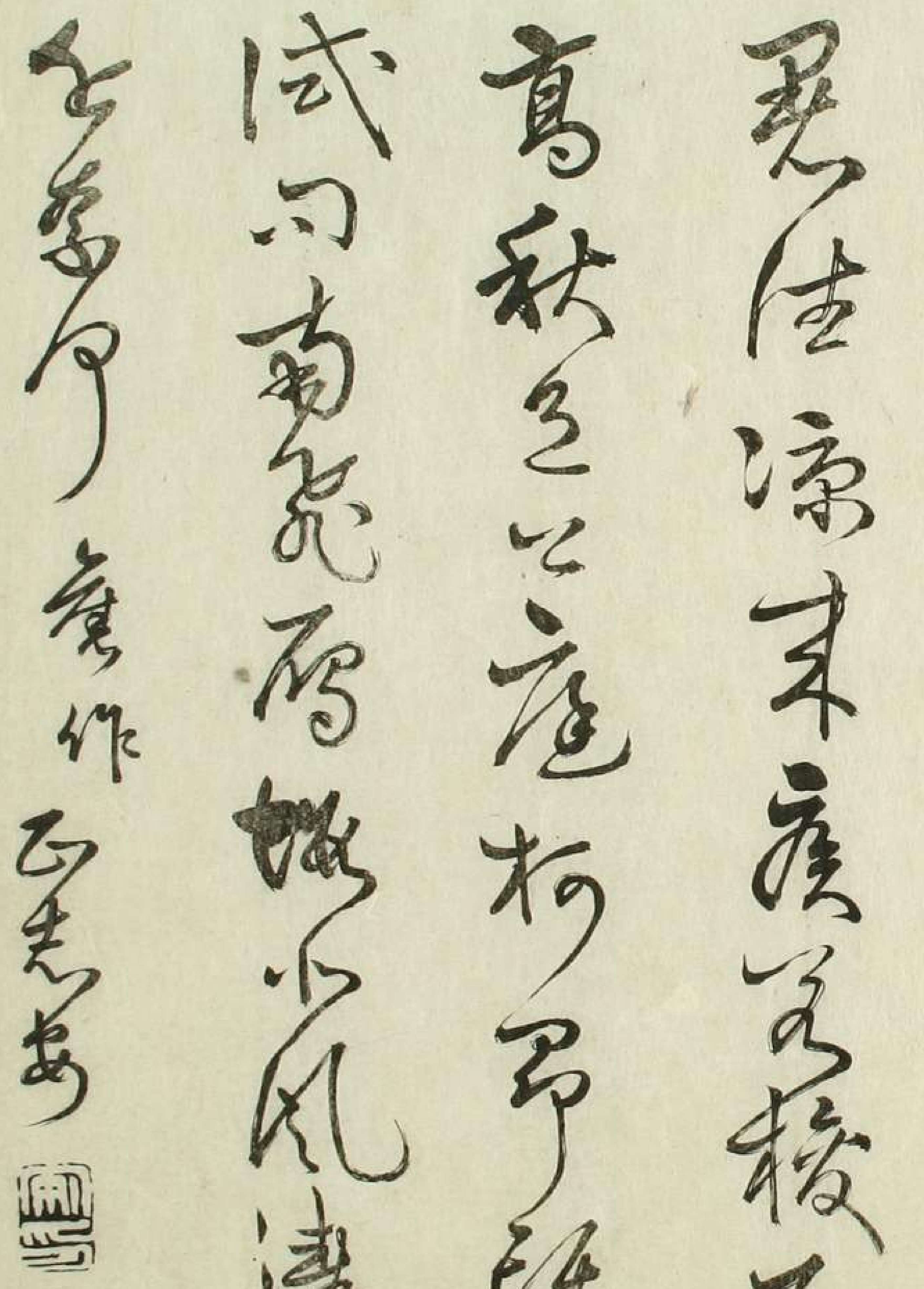
十七日揚帆向西。回視志姑覃既没高濤間。

十八日早船在多羅久島東北五里。便風駕駛儇甚。

十九日開霽。觀日出。海水倶紅。未時風恬波平。船膠滯不前。黄昏便風復作。挂帆三分西馳。

廿日船為潮所流十里許。差午風轉東南。舟人忽報曰。距根室僅三里矣。舉舟懽抃。食頃入港。此役海路嶮悪。將葬魚腹者屢矣。而同行十數人無一損失。豈非天幸乎。歷程往還凡百四里。歷日凡十有六。

隨境記實似易而難。架空美筆似難而易。何也。美筆者可以逞巧。而記實者動輙流平凡。況他人所記。我從而



譯之。筆々顧原文。一字不可移動。則其難可知。而此篇行文流暢。絶無拘束態。可謂能手矣。五代史四夷傳有錄容話以成一篇好文章者。此篇或庶幾焉。

癸亥人日川田剛妄評

大正八年八月十三日

昭和38 10 月

三大